



花の色を視る～ 科学者と表現者の 視点から

2021
11/6(土)
13:30-15:30

講師：村井良徳 (国立科学博物館／植物化学、環境適応学)
× 古屋絵菜 (染色家)

人間の眼と昆虫の眼。そして科学者の眼と表現者の眼。それぞれの「眼」によって花の色はどのように映っているのでしょうか。高山植物をはじめ様々な植物が作り出す化学物質の多様性と機能を探る村井良徳さんと、花を描くときに徹底的に観察するのはもちろん、ピンセットで分解して細かく見たり、口に含んだりするなど、五感で花を感じ取るという古屋絵菜さんの、二人の視点のお話です。

Profile

村井良徳
国立科学博物館 植物研究部 多様性解析・保全グループ 研究主幹 (兼) 筑波実験植物園 研究員
標本資料センター コレクションマネージャー

大学から山を歩き始め、出会った植物の生き様に魅了され、研究者になる。日本をはじめブータンなどでの高山植物のフィールド調査や、植物が様々な環境に適応するために作り出すフラボノイドなどの化学物質が、どの植物にどんな種類が蓄積され、植物体内でどのような働きをしているのかなどに着目し研究している。また筑波実験植物園で、日本の代表的な植物やクレマチスなどの多彩な花々の展示や管理もしている。



古屋絵菜 / 染色家

腸顔による染色家として甲州市の生家にアトリエを構えながら全国各地にて企画展などを開催。NHK大河ドラマ「八重の桜」のオープニングタイトルバックに作品が採用された。桜や桔梗(キキョウ)、芥子、シャクナゲ、シャクヤク、パンジーなどのモチーフは、咲き誇る花だけでなく、花びらが散る様子や、散った後の花も題材にしている。近年ではアイスクリームの代表的メーカー「ハーゲンダッツ ジャパン」の限定パッケージとして、花びらが舞い散る「グリーンティ」を制作する。



花の色を科学する～ 結晶標本が語る 色素の魅力～

2021
11/13(土)
13:30-15:30

講師：水野貴行 (国立科学博物館／生物有機化学、園芸学)
× 榎本寿紀 (OPAM)

花は昆虫や鳥などに受粉してもらうための目印の役割を果たしています。そのため、花には様々な工夫が凝らされています。花の色彩のフシギに挑む水野貴行さんに花に含まれる色素の話や、実際の研究で行われる「花の色の測定」や「花の色の再現実験」についてお話を伺います。そんな話は難しいそう？そこは大丈夫。OPAM教育普及の榎本寿紀が、質問しまくります。

Profile

水野貴行
国立科学博物館 植物研究部 多様性解析・保全グループ 兼 筑波実験植物園 研究員

2014年に東京農工大学連合農学研究科で博士(農学)を取得した後、宇都宮大学地域共生研究開発センター中核的研究員、農研機構野菜花き研究部門任期付き研究員を経て、2017年より現職。2021年より茨城大学大学院農学研究科客員准教授を兼任。専門は園芸学、生物有機化学。フラボノイドの成分標本の維持・管理を担当している。



榎本寿紀 / 大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室 室長

目黒区美術館(東京)のワークショップ・エデュケーターとして子どもから大人までの美術プログラムに関わる。2014年4月より大分県立美術館学芸普及課教育普及グループのグループリーダーとして大分県へ転居。2015年4月の開館より、ワークショップ、レクチャー他の講座を企画・実施している。



色を探る・色を考える～ 歴史・科学・実践から 綿臘脂を視る

2021
11/21(日)
13:30-15:30

講師：沓名貴彦 (国立科学博物館／材料工学、保存科学)
× 沓名弘美 (絵画技法材料研究者、日本画家)

綿臘脂は、化粧品や絵具、染料などに用いられた赤い色材です。古くは正倉院に記録が残り、古代から近代にかけて東アジアを中心に広く使われていましたが、明治以降は合成染料の普及で製造が途絶えてしまいました。この綿臘脂はどのように作られていたのでしょうか。アジアの熱帯雨林に生息するラクカイガラムシを原料に、中国で作られていたという綿臘脂の歴史と文化、色彩とその再現について、「科学者の視点」「絵描きの視点」という二つの視点から迫ります。

Profile

沓名貴彦
国立科学博物館 理工学研究部 科学技術史グループ (兼) 産業技術史資料情報センター 研究主幹

山梨県立博物館の学芸員を経て、2014年より現職へ。材料を中心とする科学技術史を専門に、人間が生み出した様々なモノを未来に伝えること、材料の誕生と発展が社会や歴史に及ぼした影響について研究している。今回は、失われた材料の復活を目指す中の一つとして、綿臘脂再現の研究を行っている話の伺うが、日本における非鉄金属生産技術の発展過程を科学技術史的視点から研究するため、中世大友府内町跡の出土品調査のため大分県へは多数来県している。



沓名弘美

絵画技法材料研究者・日本画家
沖縄県立芸術大学 非常勤講師

日本で日本画の古典技法と保存修復を、中国杭州市に留学し工筆の花鳥画を学ぶ。在学時より東洋絵画の古典的な色彩の再現に不可欠な「綿臘脂」の研究を続ける。中国、インド、ブータン等で文献調査、実地調査を行い、各材料を集め試作を行う。論文「化粧品としての綿臘脂」、「臘脂の再現にむけて」を発表する。また、紅型の特徴的なピンク色の「花色地」の表現に臘脂が最も適することから、古紅型の復元製作等に臘脂の研究で協力した。



“白”から考える 生命の色さがし

2021
12/4(土)
13:30-15:30

講師：真鍋 真 (国立科学博物館／古脊椎動物学)
× 佐野 藍 (彫刻家)

恐竜はいったいどのような色をしていたのでしょうか。そして空想上のドラゴンもどのような色だったのでしょうか。「真っ白い個体は必ず存在するはず」という恐竜博士の真鍋真先生と、イメージとともにプロポーションやムーブメントを追い続けるため白い大理石を見つめて彫り続ける彫刻家・佐野藍さんによる対談です。「未知っち、見ちっち vol. II Color & Science」の最終回、科学者の視点と彫刻家の視点の対談が交差します。

Profile

真鍋 真
国立科学博物館 副館長・研究調整役
標本資料センター コレクションディレクター

横浜国立大学教育学部卒業後、ミエール大学大学院修士課程、英ブリストル大学大学院博士課程修了。国立科学博物館地学研究部研究官を経て、現職。博士(理学)、古生物学者。専門は古脊椎動物学。恐竜など、中生代の爬虫類、鳥類の進化を研究しながら、恐竜など中生代の爬虫類、鳥類化石から、生物の進化を少しでも理解しようと、化石と心の中で対話する日々を送っている「科博の恐竜の先生」。著書に『深読み! 絵本「せいめいのれきし」』(岩波書店)、『恐竜博士のめぐるしくも愉快な日常』(ブクマン社)などがある。その他、恐竜の図鑑や本の監修、博物館展示・展覧会の監修を数多く手掛ける。



佐野 藍 / 彫刻家

幼いころ、茂みの中で見つけたニホントカゲの存在に心を奪われ、以来、爬虫類やドラゴンなど「幻の存在」である幻獣の絵を描く。その後、大理石の持つ神秘的で強い存在感と幻想的な雰囲気惹かれ、脳の中にある漂うモノ、幻の存在を自分の目の前に強く具現化させたいと、神話や伝説に登場する幻獣やドラゴンをモチーフに彫刻を行う。OPAM教育普及には触れる教材[Hands on Works]として、大分県豊後大野市の石灰岩で作った、寝ぼけているような赤ちゃんドラゴン(アルビオンの民 一水辺一)他がある。



●会場●

大分県立美術館 2階 アトリエ+体験学習室

●対象・定員・参加費●

中学生から一般(要事前申込) 30名程度(各講座) 無料

応募締め切り
10月25日(月)
必着

●申込方法●

メール(edu@opam.jp)へ、[件名]に講座名、[本文]に希望コースと日時、参加者氏名(ふりがな)、電話番号、中学生以下は保護者氏名、年齢、学校名をご記入の上、お申込み下さい。返信をもって受付完了となります。応募者多数の場合は、抽選になります。

●お問い合わせ・お申し込み先●

大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室

〒870-0036 大分市寿町2番1号 TEL097-533-4502 FAX097-533-4530 mail:edu@opam.jp